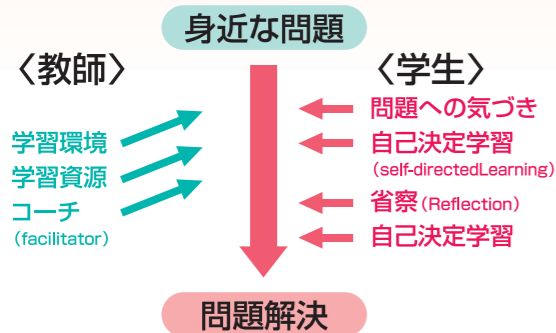


能動的な学習能力を引き出し、人間性豊かな医師を育てる。

三重大学では、学生の「感じる力」「考える力」「生きる力」とそれらの基盤となる「コミュニケーション力」を育てることを目標に、PBL-Tutorial教育を導入しています。この教育方法は、学生が自ら課題を分析し、その中の問題を発見・解決していく「問題発見解決型学習」で、特に医学部では、将来医師として患者様とともに問題を解決していく能力を養うことのできる教育方法として、その効果が期待されています。



● 学生の内在する能力を育てる



- ・ 医師として、専門知識をツールとして使いこなせるセンスを育てる。
- ・ 患者様の内面的なケアまで考えられるコミュニケーション力を育てる。
- ・ 医療現場で直面する問題を、自己解決できる力を育てる。
- ・ 医師としての心構え、使命感を育てる。

医学教育カリキュラム

- 1、2年次～3年次前期 ● 基礎医学教育
- 3年次後期～4年次 ● PBL-Tutorial 教育
- 5年次 ● 診療科での必修研修
- 6年次 ● 関係教育病院での臨床実習

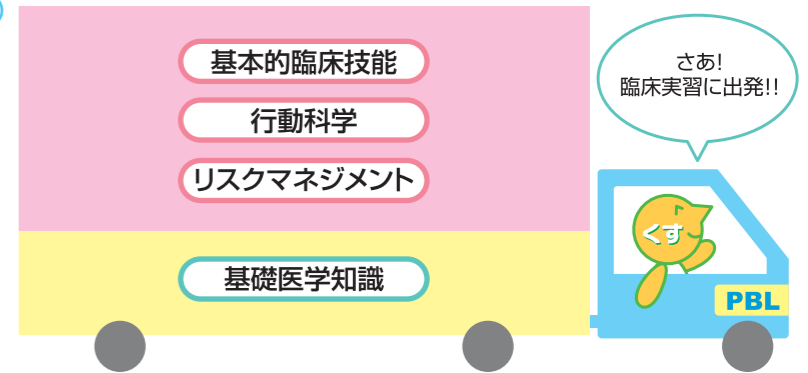
どんな風に学ぶ?

- 7～8名の学生とチューター (教員) 1名がグループを形成
- 約1ヵ月間、3～4つの課題について自己学習とグループ討議を繰り返し行い自己評価
- 新たなグループメンバーで、次の課題を検討 (1年半で12回、50課題に取り組みます)

どんな課題を学ぶ?

● 具体的症例に基づく学習

- 58歳男性。会議中に、突然の胸痛と冷汗が出現し、救急車にて来院した。
(答え) 急性心筋梗塞
- 23歳女性。両足のむくみ、体のだるさを訴えて、来院した。
(答え) ネフローゼ症候群
- 67歳男性。食事中に、急に右半身の麻痺に気づき、その後、意識消失を来し、救急車にて来院した。
(答え) 脳出血
- 52歳女性。3年ほど前からの両手の指のこわばりに気づき、来院した。
(答え) 慢性関節リウマチ
- 生後2週間の新生児。ミルクを噴水状に嘔吐するとのことで、紹介受診した。
(答え) 先天性幽門狭窄症

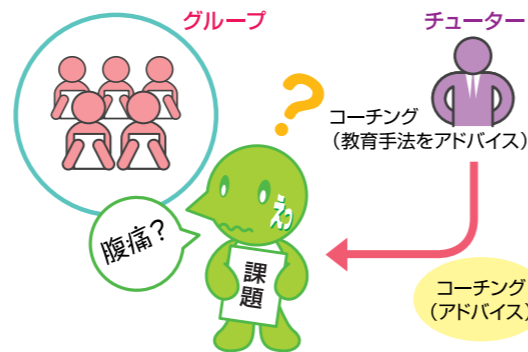


三重大学医学部医学科のPBL-チュートリアル教育は、10年以上前に、豊田学長をはじめとする当時の医学部の先生方が、ハーバード大学など海外の先進医学校を見学して導入したもので、他大学が見学にくるほどの先進的取り組みでした。その成果をふまえて、改善を加え、今に至っています。なんといっても、楽しそうに討論・自習をする医学生たちの様子を見てみると、この教育法の有用性が実感できます。

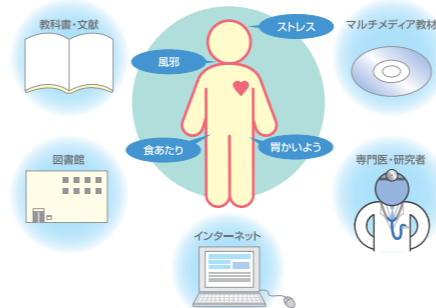
中井 桂司
三重大学大学院医学系研究科・講師
(医学教育・看護学教育センター)

PBLのプロセス

① 患者の症状を設定 (課題)



② 原因を考える (自己学習)



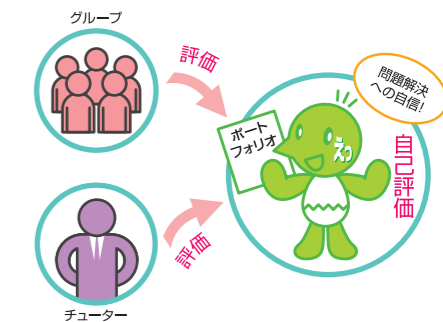
課題 (症例) を引き起こす様々な原因と対処方法を、様々な手法で検討します。

③ 対処法を考える (グループ討議)



自己学習の成果を持ち寄り、グループで討論します。ここでコミュニケーション力が養われ、チーム医療の訓練にもなります。

④ 自己評価 (学習行動評価)



自分で調べ結論を導き出すことが、自信へと繋がります。
*ポートフォリオとは、学生が自己学習を行う過程とその成果を記録したもので、レポートや論文とは違い、自己評価やチューターの評価なども含まれた記録物